

作者:澤村知秀の近況 疲労感で脳が満たされております。毎日二日酔いで仕事しているかのよう。なので今月分は書き出したのですが完結できそうにないので、過去作を投稿しておきます。

キレイな石

河原に行ってみた。河原には大小様々な石が流れ着いている。少し歩いていたら、一つキレイな石を見つけた。他の石とは違って透き通るような青色をしていて本当に半透明に見える。丸み帯びていて、表面はザラついてはいるが、もともと滑らかだったようで縁の部分だけがザラついているようだ。気に入ったので持って帰ってみる。誰かに見せたくなってきた。持って帰って周りの人に見せてみた。するとこれは空きピンの割れた破片が川の流れて縁の部分で削り取られてきたモノだよ教えてくれた。ネットで調べてみると、たくさんの似たような石の写真がとてまたくさんあり、もっとキレイに見えるものもあった。なんだか、持ち帰った石にあんまり価値が感じられなくなってきた。珍しいものでもないようだし。捨ててしまってもいいか。

イエース！ロックンロール！今日もいい天気、サイコーの1日の始まりだ。ロックスターな俺様は今日も一日太陽浴びまくリデイズ。体があつたまってきた、お隣の君達も熱くなってきたかーい。うんうんそうだ、毎日変わらないよな、俺ら石だし。昨日も1週間前も1ヶ月前も、なんなら1年前もほとんど動いてねえ！俺ら河原の石だからよ！しょうがねえよ、石に生まれちゃったからには石として生きるしかねえ。

そんな俺も昔はもっとデカイメンバーでバンド組んでたんだ。思い出すねえ、あの頃はたくさん人間どもに握りしめられてた。そう、世界的にメジャーなバンド「コカ・コーラ」だったからなあ。みんな俺らを求めてた、求められてきた。俺らの音はシュワーっと響いてゴクツと鳴るんだ、最後にはゲエーツプてなもんよ。これで人間どもはトリコになっちゃうようだ。やみつきてやつだな。

ある時さ、一人の人間が俺らの音を求めてきた。俺らはいい気になってついて行っちゃったのさ。まさか、あんな事になるなんて思いもしなかったが。そいつは俺らをキャンプに持って行っただな。何人かの人間と一緒にバーベキューやったりテント立てたりしてたんだ。流石に暑くなったみたいでクーラーボックスから俺らを取り出した。出番がきたぜ！ここぞとばかり、俺らは最高の音をだしてやったぜ。「シュワー！ゴクツ！ゲエーツプ！」決まった、過去一決まったと思ってた。でもその人間はその後俺らを川にめがけて投げ捨てやがった。おいおいアンコールじゃあねえのかよって思うが早いか、デケ工石にぶつかるが早いか分からなかったが、ガシャン！と、いきなりバンドは解散、俺はそこから急にソコ活動が始まったんだ。人間どもの都合で

こうなっちまったから最初のうちは近くにいたメンバーもキレちまってて、触れるものみな傷つける勢いだった。実際温厚な俺でさえみたことねえぐらいにトンガってた。みんな怒ってたよ。でも、時間の流れと川の流れは無情でさ、少しづつメンバーとも離れていっちまって、あんなにトンガってた俺様も歳をとるごとに丸くなっちまうんだなあ。寂しかったぜ、バンドメンバーが消えていくし、俺の形も変わっていくし、前はどんなだったか忘れちまうほど長い時間が経ってた。そんな流れの中で俺は思ったんだ、このままじゃいけねえ、こうなったら1人でもロックスターになってやるってな。そうこうしてたら、いつの間にかザラついた顔でここに辿り着いたってワケさ。ま、たまの昔話はお終いよ。

ん、遠くから人間が歩いてきてるな。近付いてきやがる、人間にはいい思い出なんかねえから通り過ぎてくれっての。やべえ、この人間、俺様と目が合っちまった。おいおい、いい笑顔してるじゃねえか、まるで宝物でも見つけたみたいな。うおっ、俺様に触れるんじゃねえ！やめろ！でも。。触られるなんて何時ぶりだよ。この人間、嬉しそうな顔しやがって、太陽であったまっただはずなのになんだか俺様も暖かく感じる。。。わ、悪くねえ。

ん、なんだ、何処かにしまいこまれたのが、真っ暗になったぞ。揺れるな、どうやら何処かに連れ去られているようだ。誘拐じゃねえか。流れるように持ち逃げされちまったぞ。こりゃあ台風が来た夜の事を思い出させるな。

真っ暗な中、荒れ狂う風がマシンガンみてえに俺様に雨粒をぶつけてきてた、轟音と一緒に川の水がドンドコ増えてきて俺様を飲み込んだ。なんにも見えない中もみくちやにされながら流れに流れてた。知らねえヤツに何度ぶつかったかわかりやしねえ。いつもなら喧嘩の一つでも吹っ掛けちまうところだが、こっちも向こうも流れに飲まれちまってるから、なんにもできねえ。ひたすら真っ暗に流れてたな。そんな事を何回も繰り返したもんだ。夜が明けりゃまた違う河原で寝てたがな。

お、そろそろ止まったみたいだな。引っ掴まれて外に出てみたら、拾ったやつが別の人間と一緒になにやら話し込んでるようだな。嬉しそうに話してたがなんの話をしてるんだか。なんだ、次は四角い板みたいな石を取り出してイジリだしてるな。河原の石とは違う石だな、黒光りしてカッコイイじゃねえか。なんだあ、表面が光ってるぞ、こんな石見たことねえな。一通りイジるのが終わったのか、誘拐犯は俺様を見てるが、がっかりしてる顔じゃねえか、シケた面でこっちを見るんじゃねえよ。俺様を誘拐しといてガツカリするとかありえねえだろうが。

あ、どうも、作者です。ここまでテキトーに書いてきましたが少しお話する事があるのです。重要でもないし茶番劇な気もするのでスルーしてもいいのですが、まあ書きたいようなので書いておきます。どうも書き始めた当初は偶然的な出会いや発見はその個人の人生においてとても大切な体験で、他者の体験との比較では測りきれない当人の内面的価値観を育む重要な事であると。そう訴えたかったとっていたようです。ですがここまで書いてきてこう思いました、「読んでくれる人に説教するとはお前はどんだけ調子にのっているのだ」と。そうなんです。駄文にも

関わらず読んでくれる人がいるのにその人にむかって説教してやろうとしている自分がいるのです。いやあ大変恥ずかしい。恥ずかしいを乗り越えて自分を罰したいぐらいです。宮崎駿監督も息子の吾郎が初監督したゲド戦記の試写を見たとき「自分の思いで作ってはいけない」と漏らしておりました。そんな大それた物を書いているわけでもないですが、許せないのだからここからは川の流れのようになるように書いていきます。お話がどうなるのかわからないし。結末も考えていません。なんなら書かないかもしれません。

流れる、流れる。どこから来たかのか分からないし、どこに行くのかも分からない。最初からそう決まっていたかの様に、ただただ過ぎ去りまた新しく出会う。

時々自分は留まっていたいのかと思うこともあるけど留まることもできなかつたし逆らうことなんて無理だった。ただ、流れることも嫌では無かった、当たり前のことの様に感じていた。

時折面白いやつらもいた、流れに逆らう奴らだ。流れと反対方向に進んで行ってた、必死に必死に進んで、進んだ先で動かなくなった。そしたら今度は流れに戻る。流れて流れて下っていく。最初から逆らわなければいいのに、どうせ下るんだから。何度も見ていると、どうやら彼らは逆らっては下るという流れなんじゃないかと思えてきた。なんて事はない逆らっていた様に見えてただけだ。

またある時は、流れない奴もいた。大きな奴らで全く動かない、時々流れを止めようとさえ試みる奴らもいる。頑丈な奴らだったが、よく見てみると少しずつ少しずつ形が変わっていつている。もっと良く見ると奴らは細かくなって流されてた。小さな奴らは大きな奴らの変化した姿のようだ。どおりでそこらにいっぱいいるわけだ。結局流れを止めるどころかゆっくりと流れるだけだった。

いろんなところで隅々まで流れて行つたし、隅々から流れてきた。流れが早くなって巻き込まれた奴らはひっくり返って、またひっくり返る。逆にほとんど流れてないのかとも思えるくらいゆっくりだったりする。最初のうちは凍るほど冷たくて終わりに行くほど溶けちゃうくらい暖かい。

最初の内は巻き込まれたんだと思つてた。何度も何度も巻き込まれ流される。下って下っていく。留まったかと思えば、また最初から巻き込まれて繰り返す。形を変え、見方を変え、気持ちも変える、とめどなくとめどなく永遠そういうもんだと思えた。変の普遍。でもそうでもない。違つたんだ。何度も繰り返す内に流れと一体になる感覚が表れる。巻き込まれるでもなく、移動しているわけでもない、流れそのものが意識を同調させるような感覚。動けない、動かされると、自他に起点がある事でもない。自分が溶け出して今までの自分と他の境界を突破し、自分

の定義を脱ぎ去っていく感覚。言葉で表現するのが難しいけど、子供の時に言葉を使い始める前の状態に近く、言葉による固定を望まない必要ない感覚。限りなく流れそのものになる感覚。極めて奇妙な状態でありつつ日常にもどり一人として社会生活を送れる事もできる状態になる。でも歩いてみた時に一步後ろの自分にふと気がついてしまう。連続してその感覚が残り続けるような不思議な意識の連続。流れを俯瞰するのではなく逆で流れを主観化する。そうしたいわけでもないのか、いや望んでいるのか分からない。ただそうになってしまう事に違和感も拒否感も持ち合わせない。ただ、一人としてそう感じているだけで他者と同じく流れているようにも感じない。むしろ他者を感じる時には日常に戻ってきている。理由もいらないしこの感覚を排除しようとも思えない。この説明文すらも意味をなさないし何故書いているかもわかっていない。ただただ、こうなっちゃいました。なっちゃってました。

最後に予感がある。流れからも透き通ってしまっている自分になるような。誰からも理解してもらおうとも思えなくとも自分だけは理解してしまっちゃうような。なんだろうか。

いやあ、何書いてるんでしょうか。自分でツッコミを入れたいんですが、どうも何も考えない様にしたら、こんなになっちゃったのです。考えたままと思ったままとそのままですが、分けてこのままにしておきます。ほっといたら自分語りを始めるんですね。初めて気がつきました。いや全部自分語りとも言えますが。頭使った感より気が抜けちゃった感があるんでこれでおしまいにしておきましょう。終わりにこれ書かなかっただら心配されそうで落ち着かないので、自分は大丈夫です。ハイ。